

小名木川から仙台堀まで

江東区深川江戸資料館

先号は、両国橋から小名木川以北の地域の歴史や史跡を紹介しました。今回は、小名木川から仙台堀あたりまでの歴史や史跡を紹介します。

1. 深川の新寺「霊雲院」

小名木川に架かる万年橋の南詰に、「霊雲院」という境内5,365坪（当資料館の約7倍）もあるたいへん大きな寺院がありました。この寺院は、元は黄檗宗でしたが、改宗して曹洞宗になり、宝暦8年（1758）下総国（千葉県）から深川に移ってきました。江戸中期の創建で、広大な敷地を持つ寺院として、また、田沼意次の保護もあり、桜の名所でもあったことから、当時、世間では「深川の新寺」と呼ばれて大変な賑わいを見せていました。

震災・戦災で大変な被害を受け、規模も小さくなり、戦後東村山市へ移転しました。

2. 三菱・三井・渋沢邸と清澄庭園

近代海運が著しく発展をみせる明治10年代は、三菱（岩崎）、三井、渋沢栄一といった政商たちが活躍しました。彼らは、商品流通の発達した深川に邸宅を構え、広大な庭園を持ち、商談の場として活用していました。

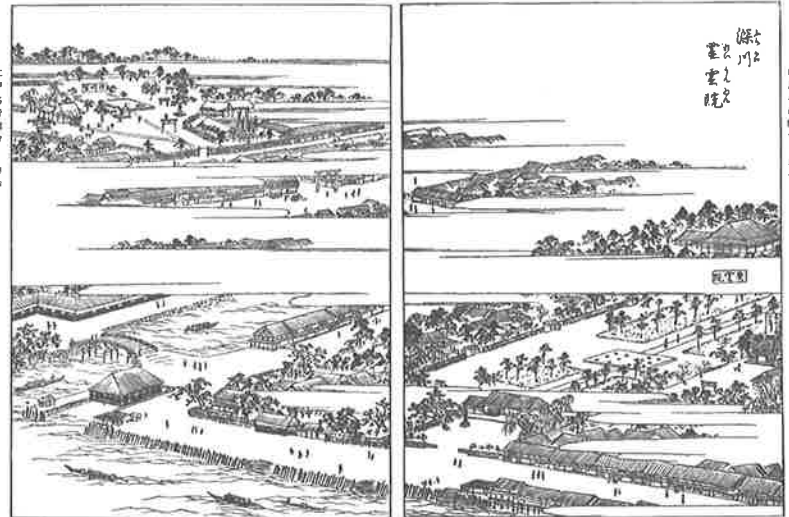
三菱（岩崎）は深川清住町から伊勢崎町（現清澄2・3付近）にかけて、三井は岩崎邸と隣接した北側の深川西大工町（現清澄2）に、渋沢は深川福住町（現永代2）に屋敷を構えました。

この内、庭園として唯一残っているのが三菱（岩崎）の庭園で、現在の「都立清澄庭園」です。

清澄庭園は、江戸時代、下総国（千葉県）関宿藩主久世家の下屋敷があったところで、この頃からある程度庭園の形が造られていました。

明治に入り、幾度か所有者が代り、その中には徳川慶喜夫人や、「郵便の父」と言われる前島密などもいました。

そして明治11年（1878）、岩崎弥太郎の所有になり、庭園の改修が進められました。同13年には



『江戸名所図会 深川霊雲院』

右側全体に大きく霊雲院が、左側上部に「深川神明宮」、下部に「万年橋」が描かれており、当時の立地や位置関係、周辺の様子がよくわかります。

「深川親睦園」と名付けられ、三菱社員の慰安と賓客の場となりました。弥太郎没後、弟弥之助が兄の遺志を継ぎ、庭園は同24年に完成しました。完成当時は、隅田川から水を引き、潮の干満に合わせて池の景観が変化する「汐入り」庭園でした。

大正12年（1923）、関東大震災で多大な被害を受けましたが、翌13年に比較的損傷の少なかった東側半分を、当時の所有者であった岩崎久弥（弥太郎の長男）が東京市へ寄贈しました。

当園は、昭和54年（1979）3月31日、東京都名勝第1号に指定され、都内屈指のオアシスとなりました。

庭園内は、全国の名石・奇岩が配置されており、また池の端を飛び石で「大磯渡り」「磯渡り」として歩けるようになっています。涼亭・大正記念館の建物は、集会施設として利用できますので、名園を眺めながらの催しには最適ではないでしょうか。

3. マルチ人間源内の電気実験地

好奇心旺盛で、各方面に多才ぶりを発揮した江戸時代中期の本草学者・平賀源内（1728～80）。本来、本草学とは薬用の素材として、植物・動物・鉱物を採集、調査、研究する、今でいう薬物学ですが、江戸時代になって薬物のほか広く物産を対象とするようになり、博物学的な性格を持つよう



『東京一目新圖』（明治30年 1897刊）部分（人文社 復刻）
本図は深川区の一部で、伊勢崎町の大きな建物に「岩サキヤシキ」、上ノ橋北側に「セメント製造」が読み取れます。

になってきました。源内は、高松藩の蔵番でしたが職を辞し、江戸に出て「薬品会」や、「物産会」を開催しました。彼の著した物産会の解説目録『物類品臨』には、朝鮮人参栽培法・甘蔗(サトウキビ)栽培法・砂糖製造法なども示されており、在来の伝聞や解説だけでなく、産業も考えた一歩進んだ本草家であったことが窺えます。

また、源内は、戯作者「風来山人」として『風流志道軒伝』・『根南志具佐』を、浄瑠璃作者「福内鬼外」として『神霊矢口渡』を著すなど、その多才ぶりが窺えます。この源内が、安永5年(1776)初めてエレキテル(摩擦起電機)を修理・復元し、エレキテルの実験を行いました。実験地は、官医武田長春院の下屋敷を借りて住んでいた深川清住町(現清澄1)で、今の清洲橋の南、佐賀町河岸通りの読売江東ビルあたりで、現在石碑が建てられています。

なお、源内が作ったとされるエレキテルは、通信総合博物館(東京・千代田区)と平賀源内先生顕彰会(香川県)に保存されています。

4. 仙台堀とセメント工業 発祥の地

仙台堀は、隅田川への河口にあたる「上之橋」の北側に、陸奥仙台藩の蔵屋敷があったところから付けられた名称です。現

在、上之橋から清川橋までは、東京都の排水機場となって埋立てられています。この堀は、昭和40年(1965)の河川法改正に伴い、昭和8年に完成した砂町運河と合わせて「仙台堀川」となりました。現在は、大横川から小名木川合流点まで「仙台堀川公園」として、都内最大の親水公園となり、区民の憩いの場となっています。

仙台藩蔵屋敷は、屋敷内で花火が行われていた時期がありました。この時は、万年橋から佐賀町辺りは、人の往来も出来ないほど賑い、万年橋の欄干が折れる事故もありました。一説には、この事故で屋敷内の花火が取止めになったともいわれています。

明治5年(1872)、大蔵省土木寮建築局がここに「官営」の撰綿篤製造所を建設しました。その後、内務省・工部省と移り、同8年日本で初めて湿式焼成法によるセメントが製造されました。同16年、政府の経済政策により、民間へ払い下げられ、この工場を受け継いだのが浅野総一郎です。当初はまだ所有権は政府にありましたので、彼は一括売却を政府に要請し、翌17年に譲渡されました。以後、日本のセメント業界で活躍しました。

現在は、太平洋セメント清澄ビルになっており、南側の正門を入った右側の庭園内に「本邦セメント工業発祥之地」の碑があり、その隣には、原料を粉碎する「フレットミル粉碎機ローラー」と、浅野工場で製造された「コンクリート方塊」が置かれています。

「フレットミル粉碎機ローラー」と「コンクリート方塊」
浅野セメント時代に使用されていたローラーと、浅野製のコンクリート方塊。方塊の右下に「明治廿七年八月廿六日 あさの製」と刻銘があります。

